The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞『乙女の変身』（2）
Author(s)	中村，未樹
Citation	大阪大学英米研究. 2025, 49, p. 13-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100529
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

翻訳『乙女の変身』(2)

中村　未樹

以下に掲載するのは作者不詳の劇 *The Maid's Metamorphosis* の Act 3, Scene 2 から Act 5, Scene 2 までの日本語訳である。底本としたのは R. Warwick Bond 編集による *The Complete Works of John Lyly*（Clarendon Press, 1902），Volume 3 に収録された *The Maydes Metamorphosis* である。補足説明のために原文に追加した部分は［　］に入れている。

第 3 幕

第 2 場

ジョキュロ、フリスコ、モプソがそれぞれ別のドアから登場。

モプソ　ジョキュロ、どこに行くのだい？ご主人様は見つけたのか？

ジョキュロ　やあ、モプソ。君は恋人を見つけたのか？

モプソ　パンの神にかけてまだだ。

ジョキュロ　ポットの神にかけてまだだ。

モプソ　ポットだって？それは何の神様だ？

ジョキュロ　パンの神の一番近くにいる神様さ。鋳掛屋にいるパンの神[1] 全員よりも召使がたくさんいる。

モプソ　フリスコ、どこを駆け回っていた？見つけたのか？

フリスコ　見つけたよ。

ジョキュロ　何を見つけたのだ、フリスコ？

フリスコ　切れたロープを二本さ。

ジョキュロ　僕も。

モプソ　僕も。

フリスコ　君たち二人のことだ。

ジョキュロ　僕もそう言っている。

モプソ　僕も。

フリスコ　さあ、3 人一緒だ。（彼らは抱擁する）

モプソ　フリスコ、その美しい羊飼い、君のご主人の恋人を見つけられなかったのか？

フリスコ　神プリアポス[2] にかけてまだだ。

ジョキュロ　プリアポスだって？それはどんな神様だ？

フリスコ　地味な神様だ。女羊飼いの瓶をぶら下げるのに丁度いい棒を持っている。

ジョキュロ　お前は森番の小姓だから、森の神にかけて誓うべきだよ。

フリスコ　主人はシルウァーヌス[3] にかけて誓うから、僕はその神様の貧しい隣人にかけて誓わないといけないのさ。

ジョキュロ　［モプソに］君は羊飼いの使用人だから、台所の神様のパンにかけて誓えよ。

モプソ　パンは羊飼いの神だろ。でも君はポットにかけて誓っているが――それは何の神様だ？

ジョキュロ　友情の神様だ。君たちのような小さな小僧に誓いを教えるとは悪い主人たちだな。

フリスコ　君の立派なご主人様は誓わないのか？

ジョキュロ　これまで、彼が六回誓いを言うのを聞いたことがない。

モプソ　多分、病気のせいで誓えないのだろう。

フリスコ　モプソ、黙れ。僕の方が上だ。［ジョキュロに］誓言を言わないのなら、君の主人は華麗な宮廷人ではないし、跳ね回る騎士でも、良い連

れでもない。そういう人間は誓いを立て、その誓いを破り、そして罵るから[4]。

ジョキュロ　それはどういうことだ？

フリスコ　賭け事の時に誓って、それから借金のことは知らないと言い、求愛が無駄に終わったら罵るということさ。

ジョキュロ　君をこれほど邪悪に育てた君の主人は大いに責任があるな。

フリスコ　誓って言うと、僕の主人は地獄堕ちだ。彼の魂は恋人の輝く瞳の中で燃えているのだから。

モプソ　僕の主人は地獄堕ちではないけれど、死んだも同然だよ。美しい恋人の胸の中に喜びを埋めているのだから。

ジョキュロ　僕の主人は地獄に堕ちてないし、死んでもいないけど、君たち二人の主人と同じさ。つまらない羊飼いと、臆病な森番のように、迷子の羊を探して道に迷い、牡鹿を仕留めようとして疲れている。

フリスコ　まったく、僕も、主人から美しい恋人への贈り物――栗、ハシバミ、スモモ、花――を持ってあちこち歩かされて、足を痛めている。

モプソ　僕は子牛のように疲れている。毎週、小枝の束を主人のかわいい子羊がいる小屋まで運ぶのだから。

ジョキュロ　僕は疲れてはいないけど、だるくて動けない――いつもの軌道を辿る太陽に従う影を追う彼の恋人を追う主人を追っていくのだから。

フリスコ　雌馬を追う馬を追って、男がミドルトンまで行った――賢いことなら僕も言えるさ。

モプソ　どうぞ、僕たちで知恵比べだ。

フリスコ　僕たちは馬鹿じゃないのか？

ジョキュロ　それが賢い言葉か？

フリスコ　待って。足が棒になるまで歩いて、僕たちは馬鹿じゃないのか――この近くの洞窟に賢者が住んでいる。野菜か、木の実の袋、あるいはリンゴを1樽渡せば、主人をどこで見つけられるか、主人たちのうちで誰があの女性の愛を勝ち得るか、教えてくれるというのに。

ジョキュロ　その人のところに連れて行ってくれ、フリスコ。僕の主人のいるところを教えてくれるのなら、僕のズボンの穴を全部譲ろう[5]。

モプソ　ホエーを 1 瓶、彼に渡そう――僕の手間を贈り物で省いてくれるのなら。

アラマンサスが地球儀などを持って登場。

フリスコ　その人がやってきた。彼を怒らせるなよ、ジョキュロ――猿に変えられないように。

モプソ　君はフクロウに。

ジョキュロ　君はヤマシギに。

フリスコ　ヤマシギ、フクロウ、サル？

モプソ　長いくちばしで、大きな顔で、尻尾がないのか？

ジョキュロ　そいつにキスして、静かにしろ。礼儀正しく挨拶するから――こんにちは、善良な方。

アラマンサス　ようこそ、不良少年。

フリスコ　お前のことを言っているぞ、ジョキュロ。

ジョキュロ　お前のことだ、フリスコ。

アラマンサス　彼のことでも、そっちの彼のことでも、お前のことでもない。お前たち三人全部のことだ。

ジョキュロ　もし計算と謎解きが得意でしたら、説明してください。この二人は二人に仕え、あの二人は一人に仕える――これが解けたら、僕の負けです。

アラマンサス　お前たち三人は三人に仕えている、その三人は一人を探している。女性は見つかるだろう――彼が来て、彼女は去った。

ジョキュロ　賢い答えだ。彼女が去って、彼が来た――彼女が去らなかったら彼は決して来なかったから。

モプソ　賢い方、ふざけるのはやめて、モプソにはっきりと言ってください――私の主人の優しい羊飼いジェミュロが、彼の羊を世話する美しい羊飼いの女性の愛を得ることができるかどうか。あなたがこれまで味わったも

のと同じくらい美味しいホエーを1瓶、差し上げますから。

フリスコ　占い師の方、フリスコにも教えてください――私の主人、元気な森番のシルヴィオがその羊飼いの女性を得ることができるかどうか。そのお礼として、木の実が一杯入った袋を差し上げましょう。リンゴが一つか二つポケットにあったら、それもおまけであげましょう。

ジョキュロ　賢い方、ジョキュロにも教えてください、私の高貴な主人、宮廷人のアスカーニオを私が見つけられるかどうか、また彼が彼女を見つけるかどうかを――その女性のために彼は父親の寵愛と自由を失い、私は働かされています。お礼は言いましょう、我々宮廷人は賄賂を渡すことも受け取ることもできませんので。

アラマンサス　お前たちの話以上のことを理解した。求めていることは叶えよう。だが、恋人たちの涙は些細なものではないのだから、彼らの境遇をたとえ話の形にして話そう。

フリスコ　あなたのお好きな形で、僕たちの主人の境遇を聞かせてください。

アラマンサス　［フリスコに］お前の主人の雌鹿は牡鹿になるだろう。［モプソに］お前の主人の雌羊は雄羊になるだろう。［ジョキュロに］お前の主人は乙女を探して、男性を見つけるだろう。でも、その努力は報われることになるだろう。他の二人は、彼の成功を見てため息を漏らすだろう。

モプソ　では私の主人は羊飼いの女性を射止められないのですか？

アラマンサス　そうだ。直ぐに家に帰って、誤りを正すよう彼に告げなさい――女羊飼いはまもなく羊の群れから去ることになるのだから。

モプソ　主人にこのことを知らせに行きます、走って。(退場)

フリスコ　私の主人の森番は無駄に苦労するのですね。彼は成功しますか。

アラマンサス　しない。彼にそう伝えて、鹿の面倒を見るように言いなさい――また、嘆くのは止めるように。彼は今年結婚しないのだから。

フリスコ　僕は残念ではありません。さようなら、ジョキュロ。(退場)

ジョキュロ　僕も君と一緒に行っていいかもしれない。残っていてもうまく

いくのだろうけど。

アラマンサス　行ったほうがよい、お前は主人を見つけられるだろう。お前の主人は助けとなる者たちを見つけるだろう。だが、彼の望みの全てを手に入れることはない。この道を行きなさい、お前の主人が前を歩いているから。見つけたら、もう見失わないようにしなさい。（退場）

第 4 幕

第 1 場

アスカーニオとジョキュロ登場。

アスカーニオ　では、私の旅はずっと続くことになるのか？恋人に関する知らせを聞くこともないのか？人里離れた所、林、暗い森や藪の中に行っても駄目なのか？農夫や粗野な羊飼いの若者が私の大きな苦しみに反応するだけなのか？サテュロス、この地の女神、あるいは水の精よ――彼女が生きているか、いないのか、何かしるしを見せて私に教えてくれませんか。

エコー　いない。

アスカーニオ　それなら私の哀れな心は嘆きに埋もれてしまう。もう一度話してください、本当にそうなのですか？

エコー　そうだ。

アスカーニオ　では、ユーリミンは死んだのですか、それとも生きているのですか？

エコー　生きている。

アスカーニオ　優しい女神様、あなたは私の魂を死から救い、生き返らせてくれました。すぐに教えてください、どこに居るのでしょうか？

エコー　どこに？

アスカーニオ　どこか遠い所でしょうか、それとも近くでしょうか。

エコー　近く。

アスカーニオ　必死に探しているのに、何が彼女を隠しているのでしょう？監禁されているのでしょうか。あるいは変装をしているのでしょうか？

エコー　変装。

ジョキュロ　これは全部嘘ですよ。

エコー　嘘。

ジョキュロ　お前が嘘つきだとよくわかった。

エコー　お前が嘘つきだ。

ジョキュロ　私がだって？

エコー　私がだって？

ジョキュロ　そうだ、お前だ。

エコー　そうだ、お前だ。

ジョキュロ　お前は面と向かって僕にそう言おうとはしない。

エコー　お前の面。

ジョキュロ　お前がずっとおしゃべりを続けるようにしてやろう。

エコー　ずっと。

ジョキュロ　まだしゃべるのか？すぐにそうしてやるぞ？

アスカーニオ　待て、ジョキュロ。これはエコーだ。私たちが嘆くのを笑い、困るのを笑っているのだ。この森のすぐ近くに、二つの丘に挟まれた綺麗な平野がある――いつも雨の雫に濡れて爽やかな場所だ。他の物を覆い隠す樫の木も、ポプラの木もそこには生えていない。だから、その周りにある町全部が一望に見渡せる。その丘の上の葉の生い茂った木の傍では、頭上高くにある太陽の焼けつくような光も弱くなる。私はそこに行っていよう――神様の気の向くように、そしてただ彼女のためだけに。

ジョキュロ　待ってください、ご主人様。これまでずっと私たちをからかっていた奴を見つけました。そこに座っています。

アラマンサスが座っている。

アスカーニオ　この道を行けば会うだろうと、前に見た幻影が言っていたとおりの姿だ。

ジョキュロ　あの人は何の線を描いているのだ？あまり遠くに行かないほうがいいですよ。

アスカーニオ　放っておいてくれ――お前はいつも私を困らせてばかりいる。

ジョキュロ　あなたのせいで、すぐに困ることになりますよ。

アスカーニオ　こんにちは。

ジョキュロ　ご主人様、気が付きませんか――空が曇って暗くなってきましたよ。

アスカーニオ　お元気ですか。

ジョキュロ　［傍白］神のご加護が我々にありますよう。

アラマンサス　失礼しました――あなたがたが見えておりませんでした。

アスカーニオ　こちらこそ、お邪魔してすみません。

ジョキュロ　こんな顔は見たことがない。

アラマンサス　いつもこのように学問をしながら時を過ごしているのです――線から線まで均等になるようにして。

ジョキュロ　この人は綴りを学んでいたのだな。表の真ん中に A、B、C と書いてあるし。

アスカーニオ　この洞窟で暮らしている訳を聞いてもよろしいでしょうか。

アラマンサス　この不幸の只中において、私が話せるのは運命の女神の気まぐれさだけです。かつて私はレスボス島の君主で、天が私に微笑んでいる間は人々に愛されて暮らしていました。しかし、この世の辛い苦しみに会い、私の喜びは悲しみへ、私の利得は損失へと変わったのです。

アスカーニオ　どうか続けてください。話の途中で止めないでください。

ジョキュロ　［傍白］エール一杯分の値打ちもないだろうけど。

アラマンサス　長い話を短くすれば、それがどれだけ面白いものであったとしても、おかしくなってしまいます。私の悲劇のような話は舞台にはふさわしいでしょう――若い頃には楽しくて、この歳になって落ちぶれたのですから。盲目の幸運の女神によって引き上げられ、そして引きずり降ろさ

れました。私自身が地位を与えた者に騙されたのです。しかし、私の心を締め付け、傷つけているのは、私の兄弟が不実であさましい恩知らずだったということです。

アスカーニオ　私の苦しみに比べれば、ささいな痛みです。時が経てば、その忘恩はいずれ忘れるでしょう――私の悲しみはずっと残るのです、私の頭上に不幸の雨を降り注ぎながら。

アラマンサス　あなたは自分の境遇を語り、私は自分の境遇を語っている。誰にとっても、自分の状況が一番悪く思えるのです。それはともかく、話を続けましょう。このように悪意によって追放され、故郷、そして兄弟からも離れることになりました。ここに住もうとやってきたのですが、嘆き悲しむことしかできません。

アスカーニオ　ですが、慰めは残っています。あなたの苦しみを分かち合う者がここにいるのですから。

アラマンサス　あなたの悲しみはどのような内容か、聞いてもよろしいですか。

アスカーニオ　あなたの苦しみよりも私は打ちのめされ、深い絶望に陥っています――癒されない悲しみが私の心を苛んでいます。一言で言いますと、私は愛し、愛されていました。しかし、その愛の甘美な宴は終わり、その甘さは苦い悲しみに変わりました。

アラマンサス　それはあなたの高貴な心を試す悩みであり、風が吹けば雨が降るのと同じく、若者にはつきもののありふれたことです。

アスカーニオ　しかし、そのために私は酷い目に会っています。長い間求めていた人が、かつての優しさを失ってしまいました。

アラマンサス　あなたは恋人に軽蔑されたのですか。

アスカーニオ　いいえ、彼女と一緒に居られなくなったのです。それも私の不注意のためで、その罪のためにこうして苦痛を味わっています。もし彼女の居場所が分からなければ、1年で私の苦しみも終わることでしょう[6]。

アラマンサス　この森で彼女は居なくなったということですか？

アスカーニオ　いずれにせよ、私にとって彼女は大事な人でした。もし、私に彼女の居場所を教えてくれる人がいるなら、きっと私は死ぬまで変わらず永遠にその人の友となることを誓います。ですから、あなたの魔法の術はよく知っていますので、この病を治す薬をくださるのなら、そして彼女の生きた姿を見せていただけるなら、私のこれまでの苦労全ては報われるでしょう、そして私の幸福が戻ったと思うでしょう。

アラマンサス　病気であった者は健康でないことを知っている。私も同じような経験があるから、辛い運命に苦しむ人には親切心をもって憐れむようになりました。彼女が居なくなってどのくらい経つのですか。

アスカーニオ　彼女を最後に見てから三日になります。

ジョキュロ　［傍白］これはいい情報だ。どんなに彼の術が優れていても彼に褒美はあげられない。

アラマンサス　マーキュリーに仕える者たち、月の女神ルナに従って、女性を示しなさい[7]。

ジョキュロ　ラテン語を話すということは、ご主人様は彼女を見つけられるだろ――いつ見つかるか教えてくれれば。

アラマンサス　何故かわからないが、愛と理性が対立している。法則から分かったことは、あなたの恋人の身なりがまったくその性とは反するものだということです。あなたに不確かな喜びを与えないために言いますが、あなたが深く愛していた人は少年だ。

ジョキュロ　これは謎かけか、ふざけた冗談ですよ。彼の技がどんなものか、私が言いませんでしたか？

アスカーニオ　私が少年を愛しているって？

アラマンサス　私の魔法はそのように告げている。

アスカーニオ　私の嘆きを増やすようなことは言わないでください。

アラマンサス　さっき言ったことは保証します。あなたを悩ませている恋人は乙女ではありません。

アスカーニオ　そのような狂ったことに惑わされるくらいなら、空に触れとか、布地で地平線を見えなくするとか、海の上を歩くとか言われた方がいい。

アラマンサス　このことが偽りであるなら、私は魔術を捨てることにしよう。

アスカーニオ　では、悲しみで一杯になって、私の恋人は変身してしまったのだ。

ジョキュロ　ご主人様、安心してください。今年はうるう年ですから女性が半ズボンを履くのです、ペチコートは高いですし。彼が言いたいのはきっとそういうことです。

アスカーニオ　ああ。では、私の苦しみはずっと終わらないのか。

アラマンサス　悩んで怒り出すのは止めなさい。しばらくここを歩きなさい、あなたの恋人が見つかるでしょう。

ジョキュロ　女性と少年か――これは良い組み合わせだ。収穫時の雪、太陽と大雨みたいだ。

ユーリミンが歌いながら登場。

ユーリミン　［歌］私を支配する不吉な星は助けてくれないから
来たれ　優しい死よ　そして私の不幸を終わりにしてください
彼は故郷を離れ　私はその姿を失いました
大事な恋人のために　こんなに大変なことに

でも、私が自慢できるのは、フォイボスは不実であったけど、この変わった姿のおかげで彼の欲望を食い止められたこと。あの人たちは誰？このように変装した私を見られるのは恥ずかしくて赤くなってしまう。

アスカーニオ　あれは私の恋人ユーリミンだ、そして彼女ではない。

ユーリミン　誰かが呼んでいる。男性の方々、さようなら、この姿で見られるわけにはいかない。(退場)

アスカーニオ　私の恋人、私の喜び、私の命――あの目と顔と声、あれは彼女に違いない。私の恋人だった人だ、追いかけよう。彼女が鷲のように飛

び去ったとしても、私は決して休まない、彼女を再び見るまでは。（退場）

アラマンサス　愛のため夢中になって、彼は私のことを忘れてしまった。ゆっくり追いかけることにしよう、彼の運命の成り行きを見たいから。（退場）

ジョキュロ　彼らは行かせよう、一人ずつ。僕は一人になりたいから。よくある変身だな――彼の魔法でこの木をタルトに変えてくれたらよいのだけど。そうなったら、ここを離れるかどうか――でも、やっぱり行かないといけない。（退場）

第 2 場

シルヴィオとジェミュロ登場。

シルヴィオ　そういう取り決めで良かったよな、ジェミュロ？

ジェミュロ　私が約束を破ったためしがないことは知っているだろ。それに何が起ころうと約束は守る。

シルヴィオ　私もそうしょう。ここが彼女の小屋だ、彼女を呼んでこよう。

ジェミュロ　そんなに無作法なことをするのか？

シルヴィオ　我々だけではこの言い争いは決着がつかない――どちらもうぬぼれているのだから。

ジェミュロ　私ではなくてお前がだろう。お前は 5 月の朝の牧草のような瑞々しい緑色の服を着ているくせに、灰色の服を着ているといって羊飼いを馬鹿にしている。だが森番、このことを肝に銘じておけ――彼女は私の服ではなくて私の心を気に入っているのだ。

シルヴィオ　お前もそうだ。お前のことが好きだから彼女が羊の世話をすると思っているのだろう。だが、都会の女性は手を貸すが、心を渡すのは遠くにいる男だ。ユーリミンはシルヴィオにそうするのだ。

ジェミュロ　彼女がジェミュロに対して明るくふるまったとしても、彼女の心はその目の日時計の中にあって、その針は私が彼女のものだと告げてい

る。

シルヴィオ　ではすぐに試してみよう。ユーリミン。

ジェミュロ　ブナの木で喉を塞いでしまえ。猟犬たちにそうやって呼びかけるのだろう。羊飼いにはマナーがないと思っていたが、森の人間は余計に乱暴者だ。

シルヴィオ　彼女にどうやって呼びかけるのだ、羊飼い――彼女の名前以外に？

ジェミュロ　ホビノル[8]は彼の女性をそう呼んでいる。じゃあ、キャロルを歌いながら、静かな小屋に居る彼女を呼び出そう。

シルヴィオ　分かった。それで、どっちから歌い始める？

ジェミュロ　くじ引きだ。

シルヴィオ　よし、長い方が先だ。［くじを引く］

ジェミュロ　私の方だ。

シルヴィオ　大きい声で歌うのだぞ、奥にいるからな。

ジェミュロ　お前は森番のやり方で歌えばいい。羊飼いは歌い方を知っている。

シルヴィオ　歌い始める前に、取り決めをもう一度――後で口論になってあの人に迷惑をかけないように。もし彼女が僕を選んだら、お前は納得しなければいけない。彼女がお前を選んだら、私もそうする。

ジェミュロ　決まりだ。パンの神、あなたの葦の笛で甘美な音を響かせてください。どうか、あなたに仕える者を助けてください。

［歌う］ヒバリが高く空を飛び　灰色の朝に挨拶する時
　　小さな子羊が純白の腹を見せて立ち上がるように

シルヴィオ　カシの木から樹液が流れ　ナイチンゲールが棘の上で歌うように

ジェミュロ　私の気持ちは高く舞い上がる

シルヴィオ　私の感覚全てが刺激される

ジェミュロ　彼女が羊の群れを見る時

シルヴィオ　彼女が羊の鹿を見る時

ジェミュロ　ユーリミン

シルヴィオ　ユーリミン

ジェミュロ　出てきて

シルヴィオ　出てきて

ジェミュロ　出てきて　この恋の嘆きを癒してください

それぞれがこの台詞を歌った後、二人は一緒に歌う。

シルヴィオ　森番の恋人

ジェミュロ　羊飼いの恋人

ユーリミン登場。

ユーリミン　森番と羊飼いさん、キャロルでユーリミンに呼びかけても無駄ですよ。彼女は去りました。この小屋と羊たちは、彼女の兄である私が世話することになりました。彼女は出ていく前、私にパンの神にかけて誓わせました――ジェミュロのためにそのどちらもちゃんと守るように。

2 人はそれぞれ離れて、不思議そうに彼女を眺める。

ジェミュロ　何だって？私の恋人に彼氏ができたのか？

シルヴィオ　何だって？私の女に別の男がいたのか？

ジェミュロ　この男は僕からユーリミンを奪うつもりだ。

シルヴィオ　この若者はユーリミンを得る力を持っている。

ジェミュロ　このよそ者の美しさは私が求める人を連れ去ってしまう。

シルヴィオ　このよそ者の目は彼女を虜にするだろう。

ジェミュロ　こいつはアドニスだ。

シルヴィオ　ギャニミードだ。

ジェミュロ　私の気持ちは冷めてしまった。

シルヴィオ　私の心は鉛のように冷たい。

ユーリミン　君たちは、訪ねてきた理由を忘れている。恋人を探しに来たのでしょう――彼女は行ってしまいましたが。

ジェミュロ　お前のせいだ。

ユーリミン　そうではありません。彼女は行くつもりはなかったのですが、私たちの両親が強く命令したのです。

シルヴィオ　それはお前の言い訳だろう。お前は彼女の家族ではなくて、私の恋敵として彼女を求めに来たのだ。

ユーリミン　偉大なるアポロンの神性にかけて、あの羊飼いの女性は私の身内です。たとえこの世と引き換えでも、私は彼女と結婚しません。彼女と私は同じ子宮の中で育ったのですから。ですが彼女は去ってしまったので、羊は私に任されました。

ジェミュロ　この羊小屋は私の持ち物だから、中に入って確認する。

シルヴィオ　私もそうしよう。(シルヴィオとジェミュロ退場)

ユーリミン　どうぞ。でも慰めにはならないはず。私の姿は男ですが、まだ女性の心を持っていて、知っている秘密を打ち明けたくなる。神様、お許しを――私が変身したことを言ってしまいそうでした。静かに、彼らが戻ってきた。

シルヴィオとジェミュロ登場。

シルヴィオ　彼女を見つけたか？

ジェミュロ　いや、探しても無駄だった。

ユーリミン　そう言ったでしょう。

ジェミュロ　聞いてくれ――お前のその綺麗な容姿からすると、話したことは真実のようだが、でも、この世は欺瞞だらけだから。私たちと一緒に、この森に住んでいるアラマンサスという優れた知恵と術を持った賢者のところに行ってください。彼はこの奇妙な出来事と変化がなぜ起こったかについて、私たちの疑問を解決する手がかりを与えてくれるかもしれません。

ユーリミン　分かりました。あなたがたの都合が良い時に行きましょう。

シルヴィオ　今から行こう。

ユーリミン　［傍白］その人が本当に魔法の術を使えるのなら、あなたたちは思い悩むことになるでしょう。(全員退場)

第 5 幕

第 1 場

アスカーニオとユーリミン登場。

アスカーニオ　ユーリミン、もし君が彼女であったら私から急いで逃げないでくれ。以前、君は私の言葉を称賛してくれた。君は僕のことがそんなに嫌になったのかい？

ユーリミン　アスカーニオ、以前なら、あなたの前に居ることが私の幸せでした。でも、不幸なことに状況は変わりました。最早そうではないのです。

アスカーニオ　僕がどんな悪巧みをした？君が僕を嫌いになるような、どんなひどいことをした？もし君が以前の君であるなら、そして偽りの友ではないのなら、別の性になって仮の姿をしているからといって、心にあるこれまでの愛情を変えたりはしないでおくれ。男性の格好になっても、君は前と同じユーリミンだ。

ユーリミン　ずっとあなたの恋人でいることができればどんなに嬉しいことでしょう――心からの誓いが私の願いを叶えることがあれば！

アスカーニオ　身なりとともに、あなたの愛情も変わってしまったのですか？

ユーリミン　私の性は変わりましたが、心は何も変わっていません。

アスカーニオ　あなたの服装があなたの性と違うから何だというのだ？君は以前のような愛情を保つことができる。

ユーリミン　そうです。

アスカーニオ　では、何故そんなによそよそしいのだ？君が誓った愛情は変わってしまったのか？

ユーリミン　アスカーニオ、私の心はあなたを崇拝しています。

アスカーニオ　でも、そうやってずっと他人行儀でいるのか？

ユーリミン　他人行儀ではありません。今の私の性が許す限りのことをしているのです。

アスカーニオ　その性は不親切だ、親切さを奪ったのだから[9]。君は僕を愛していると言った。

ユーリミン　友人を愛するように。最期までそのようにあなたを愛することを誓います。

アスカーニオ　私はそのような愛を表そうとはしていない。ユーリミンがアスカーニオを愛したように愛しておくれ。

ユーリミン　私の現在の性にそのような愛は許されていないのです。

アスカーニオ　優しく見せかけながら、あなたは優しくない。君は風と同じで変わるばかりだ。

ユーリミン　性において、男性が男性を愛することは許されるのですか。

アスカーニオ　君はユーリミンではないのか？

ユーリミン　ユーリミンです。

アスカーニオ　私の恋人のユーリミンか。

ユーリミン　そうです。

アスカーニオ　君は女性だったのではないか？

ユーリミン　そうです。

アスカーニオ　そして今は女性ではなくなってしまったのか？

ユーリミン　はい、本当に。

アスカーニオ　話を聞いて混乱してきた。君はユーリミンだ。

ユーリミン　名前はそうですが、性においては違います。

アスカーニオ　では何なのだ？

ユーリミン　男性です。

アスカーニオ　恰好はそうだとわかる。

ユーリミン　あなたが見ている私の装いと私の性は一致します。

アスカーニオ　でも、逃げる前、君は女性だった。

ユーリミン　そうです、アスカーニオ。

アスカーニオ　それから男性になったのか？

ユーリミン　そうです。

アスカーニオ　では私は妻を失ってしまった。

ユーリミン　でも、あなたには友人ができました――あなたのために、自分の大切な命をすぐに差し出すことが出来る友人が。私はあなたにとってそのような友となりましょう、妻ではなく。

ジョキュロとアラマンサス登場。

ジョキュロ　見つかった。ご主人、うまく追いつきました。もう二度と会えないかと思っていましたよ。大分速く行ってしまわれたので、追いつくために垣根と溝、おまけに高い木を幾つも飛び越えてきました。

アラマンサス　うまく言ったな。でも、お前は嘘のつき方を知らない。

ジョキュロ　嘘ですって？本当ではないと何故言えるのですか？遠くにいても、私はあなたのすぐ後ろにいたのですよ。もう嘘はつきませんが、この老人は繋がれた雌豚くらいの速さで歩くことができます。

アスカーニオ　こんにちは。［ジョキュロに］こら、おしゃべりはやめろ。

アラマンサス　前に言ったことだが、どうなったかね？

アスカーニオ　良くもあり、悪くもありです、この後話しますように。哀れな私は恋人を見つけ、失いました。自分が決して得られないものを失ったと言えればですが。

ジョキュロ　お嬢さん、あなたがそんなに恥ずかしそうにしているからいけないのです。以前なら――私には関係ないですが――あなたは男性にもっと親しくふるまっていたでしょうに。

アラマンサス　男性になった女性を見つけると言っただろう。そうでなかったら、私の術はひどく間違っていたということになる。

アスカーニオ　あなたの術が示したことが分かりました。私の恋人は別の性に変わっていました。そのため、私は恋人を見つけましたが、失ったのです。

ジョキュロ　分かりませんよ。彼女を脇へ連れて行って確認してみましょう。

アスカーニオ　しかし、ユーリミン、父の宮廷から去った理由を聞かせてください。何故このように変な不運があなたにふりかかったのか、そのいきさつを話してください。

ユーリミン　この地にやってきた訳を話せば、昔の傷を再び感じることになります。別の機会にそれは話しましょう。ただ、意に反してここに来たということで納得いただけますよう。この森をさまよっている時、フォイボスに会いました。貞節を守ろうと彼の求愛を拒んだため、フォイボスは私に乱暴しようとしました。彼に凌辱されないため咄嗟に思いついた方策で、男性の姿になりたいと願ったのです。アポロンは渋々私の願いを叶えました。それからずっと、私の運命を嘆いています――自分のことが嫌になったからではなく、結婚するはずだったあなたのことを思って。

アスカーニオ　私たちの辛い運命を聞いていただきました――私と彼女がどちらも心の中で嘆いている運命を。

アラマンサス　あなたたちの心の苦しみを癒すことができる最適の治療として私に思いつくことはこうです――偉大なるアポロンは彼女を男性に変えたのと同じように容易に、男性を女性に変えることができます。

アスカーニオ　私もそう思います。

アラマンサス　では、謹んで彼に訴えなさい。あなたがたの祈りによって、彼女を再び元の姿に戻すことができるかもしれません。

ユーリミン　でも、フォイボスは私をかなり軽蔑していますので、許しを得ることはできないかと思います。

アラマンサス　自然の贈り物とフローラによって豊かに彩られたこの緑の野原に美しい泉があります。水晶のように輝くその水流はキンバイカに囲まれ、太陽の光も届きません。そこにある象牙の椅子にはカリスたち[10]が座り、泉の調べを聞いています。小川の雫の落ちる音に合わせて、綺麗な嘴の鳥たちが一緒に歌っています。そのさえずりの中で聞こえる小川の優し

い音は、鳥の歌声に伴う低音となっています。カリスたちは大地に咲くあらゆる花で作られた花輪を被っています。そこから良い香りが立ち昇ってくるので、あなたは天国だと主張したくなるでしょう。恭しくそこに向かいましょう、そしてあなたたちの苦しみを述べるのです。カリスたちはアポロンの前で慈しみ深く振舞いますから、彼らが懇願すればすぐに目的は叶うでしょう。あなたたちに代わって私が事情を話して援助を求めます。

アスカーニオ　御恩はずっと忘れません。

アラマンサス　一緒に行きましょう。できるだけのことはしますから。

（ジョキュロを除いて退場）

ジョキュロ　これだけ長い間さまよって、しまいには変な奥さんに会うっていうのは辛くはないか？

フィランダー登場。

ジョキュロ　これまで聞いた中でも、大した話だよ。実際、半ズボンは彼女に似合うと思うな。町中の奥さんたちが半ズボンを履くようになったら、旦那さんたちは不安になるだろうな。

フィランダー　教えてくれ、君がここの人間じゃないかどうか。

ジョキュロ　僕を調べるのがあなたの仕事なのですか。

フィランダー　お前は何者だ？［ジョキュロだと気づく］ああ、見つけた。

ジョキュロ　もう追いつきましたよ。

フィランダー　ここでお前に会うとは思わなかった。

ジョキュロ　そうでしょうね。

フィランダー　元気か。

ジョキュロ　こんな森の中で楽しいことが見つかりますか？あるのは木と石、茨、低木、花の芽だけですよ。

フィランダー　お前の調子がどうか聞きたかったのだが。

ジョキュロ　元気にやっていますよ。歓迎の印として、一緒にリンゴを食べませんか。

フィランダー　［腰掛ける］ジョキュロ、大分固い椅子だな。

ジョキュロ　フィランダー様、それがここで手に入れられる最高のものでして。ところで、いつ宮廷に戻られるのですか？

フィランダー　お前を見つけたから、すぐにだ。

ジョキュロ　あなたのお骨折りに報いるということで、私からの贈り物を持っていってもらえませんか。

フィランダー　誰に持っていくのだ？

ジョキュロ　公爵様に。

フィランダー　何を持っていくのだ？

ジョキュロ　生憎鹿肉が手に入りませんので、どんぐりを1樽、お祝いに。

フィランダー　どういう意味だ？

ジョキュロ　ご存じのように、彼のような人にはどんぐりで良いのです。公爵のために祈り、何かしたいと思いまして。公爵様が森のどんぐりを全部食べてくれたらよいのに。

フィランダー　ジョキュロ、我々の主人だ――言葉を慎め。

ジョキュロ　野蛮な田舎者に合う言葉で話しています。公爵様はお元気ですか。

フィランダー　すこぶる元気だ。

ジョキュロ　では、ますます元気になられますよう。

フィランダー　どうやって？

ジョキュロ　地獄の副官となって。

フィランダー　公爵がお前に何かしたから、そのように言うのか。

ジョキュロ　公爵様の息子に対する愛情のためにです。

フィランダー　公爵は最近、普通の父親が子供に対してそうであるように、父親らしく穏やかになった。それで、息子を見つけるために海岸沿いを私に探させていたのだ。そして、もしユーリミンが生きているなら、二人とも宮廷に連れてくるようにと。お前の主人はどこだ？

ジョキュロ　歩き回っています。

フィランダー　ユーリミンが見つかればよいのだが。

ジョキュロ　見つかりましたよ。私についてきてください。すぐ、彼らのいるところにお連れしますから。（全員退場）

第 2 場

3〜4 人の女神たち、アラマンサス、アスカーニオ、
シルヴィオ、そしてジェミュロ登場。

アスカーニオ　ユーリマンについての言い争いは止めてください。言葉でも誓いによっても、彼女を不幸から救うことは出来ません。彼女の姿を変えたあの方こそが、このような陰鬱な騒動を治めなければならないのです。偉大なるフォイボスの宮殿の近くまで我々はやってきました。彼の座する天球においてフォイボスに挨拶しましょう――彼が姿を現したくなるように陽気な調べを奏でながら。

シルヴィオ　ところで、ユーリミンはどこでしょうか。彼女を見失ったようですが。

アスカーニオ　可哀そうに、不安に怯えて洞窟の中で座っています。私たちの嘆願がどうなるか――彼と仲直りできるか、あるいはずっと不幸なままで居なければいけないか――分かるまではアポロンの怒れる目を避けています。

女神 1　アスカーニオ、私たちは一度あなたのために試みました。もう一回、アポロンの力を呼び覚ましましょう。彼は天上の神なのですから、最後にはユーリミンに憐れみを与えるということを疑わずに。歌いましょう、それぞれ心を込めて明るく音楽を奏でましょう。

歌

万歳　美しいフォイボス　その紫色の王座から
我々の深い悲しみに目を向けてください
あなたの優しい顔を隠さずに　隠さずに
どうか憐れみを　憐れみを　乙女の哀れな運命に与えてください

アポロン登場。

女神 1　輝ける美、水晶の如き天の瞳、もう一度あなたの慈悲を請います——我々皆の力であるあなたが、ユーリミンを苦境から救うことを。優しい神よ、私たちのこの些細な願いを叶えてください、我々がそう願えるのでしたら。それにふさわしいことを示すためにお見せしましょう、私たちがいかにフォイボスの名前を敬っているかを。

アポロン　ヘリコン山の聖なる姉妹たちよ、あなたがたをこれまで寵愛してきた。だが、この件では私の誓いを理解してもらわねばならない、あなたがたの願いを叶えることはできない。彼女があのように変わったことも、私に責任があるのではない——知ってのとおり、彼女自身の愚かな希望によることなのだ。彼女が誓う前に、彼女に伝えてもいる、最後には後悔するだろうと。彼女自身が男性の姿になることを望んだのだから、彼女があのおかしな状況を引き起こしたのだ——彼女がどのように考えるにせよ。

女神 2　ああ、あなた様が彼女にそのようにつれないのでしたら、アスカーニオのことを考えてください。彼女の変わらない愛を長い間追い求めてきた彼が、あのような辛い境遇に永遠に留まることがないようにしてください。

アスカーニオ　偉大なる神様、私は苦しい思いをしながら休むことなく探して、やっと彼女を見つけました。私は嘆き、試練を経てきましたので、もう悩むこともなく彼女を得るに値するはずです。これまで私は非常に厳しい苦行に耐えてきました。ああ、フォイボス、どうか私をこれ以上苦しめないでください。最初よりも私の苦しみを増やすような過酷なことはやめてください。私の父親は以前の怒りをもう忘れており、私の喜びが成就するのを妨げるものや問題もありません。ただ、あなたのご厚意をお願いするばかりです。私が最も幸せになるか、あるいは不幸になるかは、あなた様にかかっています。

女神 1　天上のアポロン、跪いてお願いします。どうか、大いなる怒りをお静めください。このように愚かな乙女を苦しめて、神であるあなたが何の

栄誉を得られるのでしょうか。それに、欲望に支配されればあなたの神性が汚れることになるでしょう。ですから、哀れな女性に慈悲をお見せください。叶えてくださるなら、この森の中で私たちはあなたの名声を歌にして奏でましょう。

アポロン　立ちなさい、神の技を持つパルナッサスの丘の聖なる女神たち。フォイボスはあなたたちの思いに屈した。慈悲を顧みずにおくことはやめよう。あなたがたの願いと祈りは無駄にはならない。希望は叶えよう――彼女は再び女性になった。

アスカーニオ　私の命がある限り、あなた様を褒めたたえましょう。

女神 2　私たちもあなた様に感謝の気持ちを永久に捧げます。

アポロン　タレイア――ユーリミンのいる洞窟の近くに妖精たちがいる。私の名において、あの暗い場所から彼女を案内してくるよう、妖精たちにお願いしてくれ――また、彼女の性に合う服装を気前よく彼女に与えてくれるようにということも。

女神 1　アポロン、私が行ってまいります。

アポロン　急ぎなさい。恋人たちの苦痛を和らげるために、急ぎすぎるということはない。

アスカーニオ　聖なるフォイボス、私をこのように憐れんでくださったあなたに今後ずっと感謝の意を捧げます。［アラマンサスに］ご老人、ご親切には必ず報います。いかなる形であれ、私が恩を忘れるようであれば、この世が消えて滅びることになるでしょう。

アラマンサス　私の僅かな助けによってあなたが満足され、恋人を得て願いを叶えられたのなら、それが私にとって十分な報いです。他には何も望みません。

アポロン　立派なアラマンサス、今あなたの顔を見て私は思い出した。この物悲しいさびれた森をあなたは長い間、訪れていた。その長い年月のことを私はよく覚えている――かつての酷い仕打ち、貧しい暮らし、そして長く厳しい追放の生活に耐えておられた。昔あなたは名誉ある地位にあった

――あなた自身が出世させた者たちによって、謂れのない罪を被せられるまでは。あなたの過酷な運命を私は覚えていたので、あなたに憐みをかけたいと思ったのだ。老人よ、これからは私に仕えるがよい。そして残りの過ぎ行く日々は、9人の女神たちの中で月桂樹の輪を付けて暮らすといい。時が経ちあなたが運命に身をゆだねる時、あなたは人としての生を終えることになる。死後は名誉の葉を身に纏い、ここで暮らす他の者たちと共にいなさい。最後にこのことを知るがいい――以前の不幸から救われた美しいユーリミンはあなたの娘なのだ。フォイボスをひどく苦しめたのだから大きな罰を受けるようにと思い、追放の身であるあなたからは隠していた。しかし、今は自由に再会を喜ぶといい。もはやユーリミンではない――その借り物の名前は捨てなさい、彼女はアトランタという名だ。ここにいる彼女は女性として、本来の姿になった。

アスカーニオ　それでは、私の恋人は高貴な生まれなのですか。

アポロン　そのことはもうよい。互いに抱き合うがよい。

アラマンサス　荒波によって永遠に墓の中に連れていかれたと思っていた私のアトランタは生きていたのですか。

アポロン　［ユーリミンに］そのようによそよそしく見つめたりするな――お前の父親の声だ。そしてこれがお前の恋人だ。喜ぶがいい、アトランタ。

ユーリミン　大いなる幸福に満ちた別の世界にいるかのように、私は驚いています。大きな安堵の波が押し寄せて、何と言ってよいかわからず言葉に詰まっています。ただ、このことだけ――偉大なるフォイボス、ささやかではありますが永遠にあなたに感謝の気持ちを捧げます。

アポロン　女性よ、あなたは再び姿が変わった。前の誓いをきっと後悔しているだろう。

ユーリミン　輝く栄光の灯であるアポロン、私の向こう見ずさをどうかお許しください。

アポロン　苦労したのはあなただ、私は何も食べられなかったが。

フィランダーとジョキュロ登場。

アスカーニオ　見なさい、恋人――君の喜びをさらに増すため、フィランダーがやってきた。

ジョキュロ　ああ、首尾よく見つかりました。女主人様が元の性に戻ったのを見てとても嬉しいです。

フィランダー　お二方、あなた方の御苦労に報いるため、テレマカス様があなたたちを迎えるよう遣わしました。かつての口論はみな跡形もなくなり、しか目面をしていた公爵様も笑っています。

アスカーニオ　ありがとう、フィランダー。友人であるあなたの知らせは、ジュノーの芳香のように私の精気を蘇らせました。

アポロン　女性よ、あなたがここを去る前に私の願いを一つ聞いてくれないか。

ユーリミン　喜んで。

アポロン　些細なことだ――フォイボスのため、私を忘れないようにあなたの被る帽子に月桂樹の枝をつけてくれ。そして私に会えない時には私のことを思ってくれ。

ユーリミン　私が生きている間、アポロンのために月桂樹を愛することをここで私は厳かに誓います。

ジェミュロ　［シルヴィオに］俺たちの求婚は駄目になった。行ったほうがいいだろう。

アポロン　いや、ジェミュロとシルヴィオ、君たちも満足いくようにしよう。今晩、私とあの女性たちで君たちを歓迎しよう。明日の朝には君たちを帰らせるから。

シルヴィオ　神であるあなたの命令に従い、ここに留まることにします。

アポロン　では、女性たち、陽気な調べと楽しい踊りでこの幸運な出来事を祝ってくれ。その間、フォイボスはハープを奏でよう。いつの日か自慢にするといい――あなたたちの結婚式でフォイボスが音楽を奏で、女神たちが踊ってくれたということを。

歌

辛く悲しい日々は終わり
友と友は結ばれました
喜びましょう　喜んで歌いましょう
このフォイボスの森に音を響かせましょう
希望が勝利して　絶望は消え去りました
喜びが蘇り　心配事はなくなりました
皆でこの曲に合わせて踊りましょう
月桂樹の枝に気をかけながら
(全員退場)

注

1　フライパンとの言葉遊び。
2　ギリシャ神話の生殖の神。
3　ローマ神話の森林の神。
4　“swear”の「誓う／罵る」という二つの意味にかけた言葉遊び。
5　“point”の「指し示す／穴」という二つの意味にかけた言葉遊び。
6　アスカーニオは自分が死ぬことを示唆していると考えられる。
7　この台詞はラテン語になっている。
8　エドモンド・スペンサーの『羊飼いの暦』に登場する農夫の名前。
9　“kind”の「性／親切な」という二つの意味にかけた言葉遊び。
10　ギリシャ神話の美・喜び・優雅の女神たち。